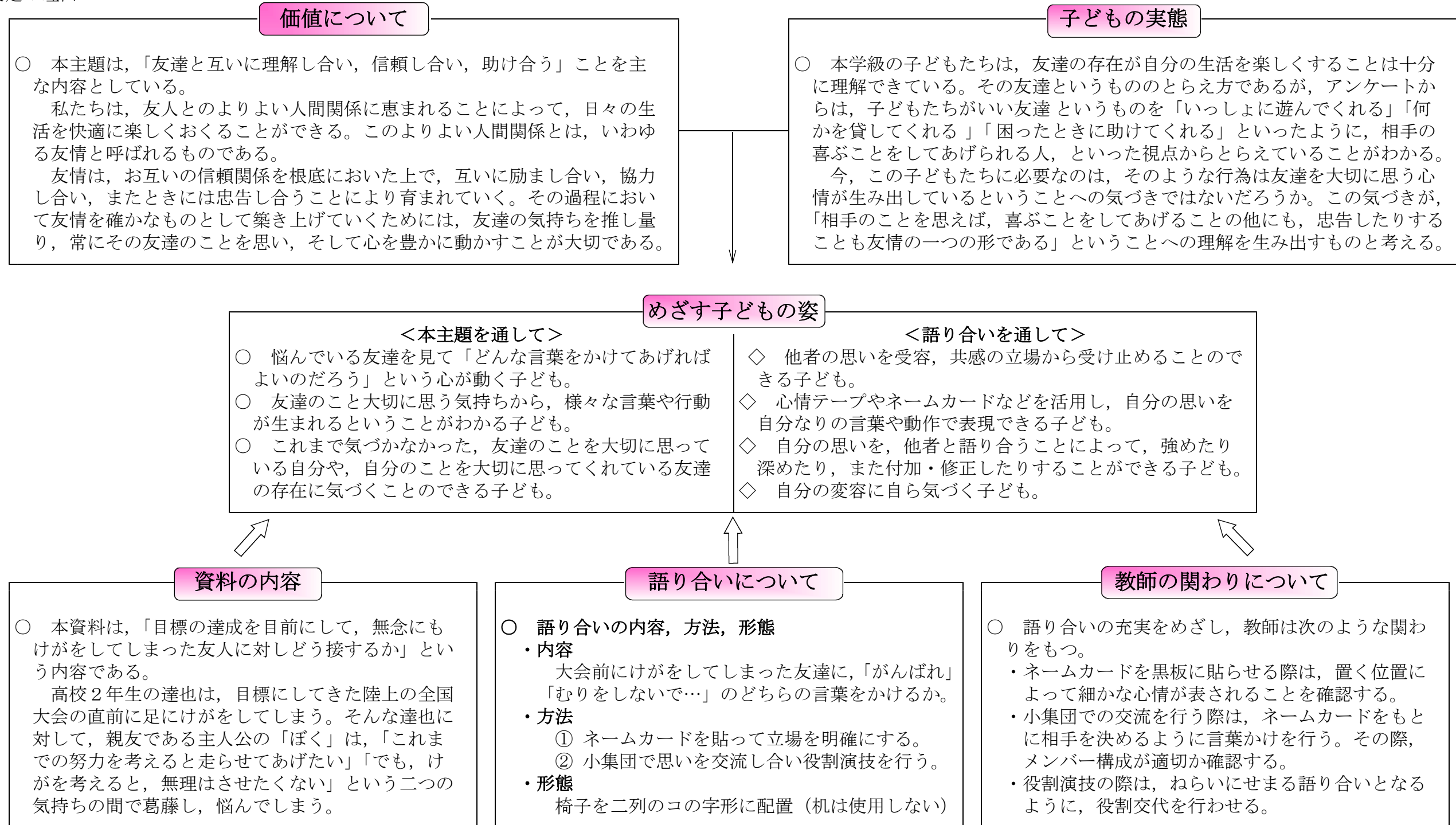


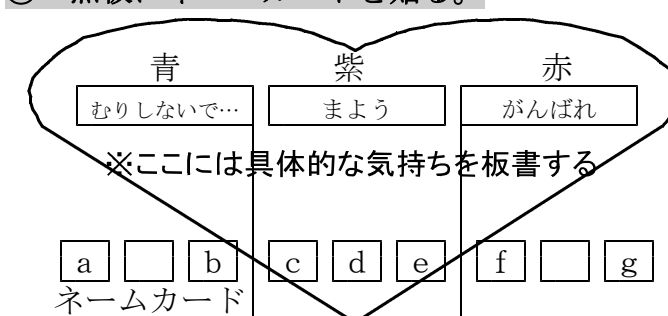
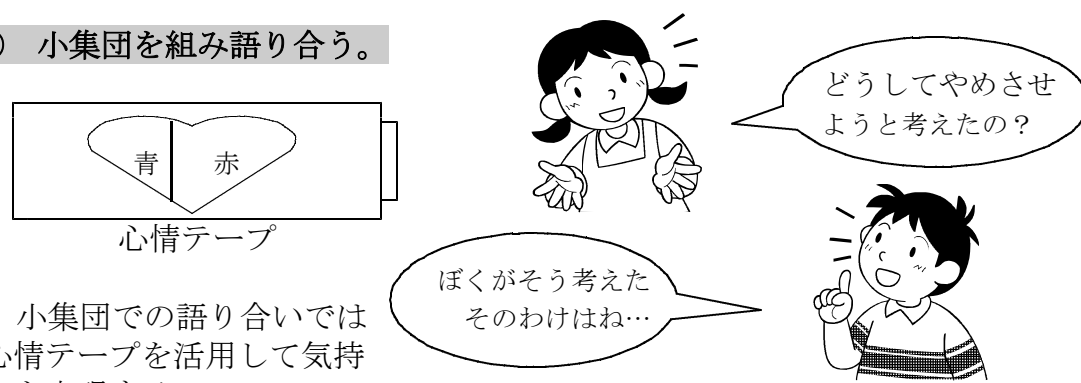

第4学年〇組 道徳学習指導案

指導者 福岡市立〇〇小学校  
教諭 〇〇〇〇

- 1 主題名 「いい友達って…？」 中学年2－(3) 信頼・友情
- 2 資料名 「友達だから…」(出展：自作資料)
- 3 主題設定の理由



- 4 本時のねらい
  - 友達の立場や気持ちを推し量り、友達に温かな心で接しようとする心情を育てる。
- 5 準備
  - ・資料「友達だから…」 ・道徳ノート ・場面絵 ・操作物(心情色カード, 心情テープ, ネームカード) ・視聴覚機器(パソコン, プロジェクター, スクリーン, CDレコーダー)
- 6 本時
  - 平成20年10月20日(月) 4年1組教室にて

	学 習 活 動	留 意 点	語 り 合 い の 進 め 方
導 入	1 これまでの学習や活動を想起し、本時のめあてを確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <b>めあて</b>                          「いい友達」について考えよう。                     </div>	○子どもの問題意識にそった学習が展開されるように、本時のキーワードとして「いい友達」という言葉を提示する。また、めあてもキーワードを使って表現する。	※ 達也のことを思うが故に、「むりしないで…」「がんばれ」という二つの思いで葛藤している主人公「ぼく」の気持ちを、共感的に語り合わせていく。 <b>発問1</b> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;">                         全国大会の前日、「ぼく」は達也に対してなんと声をかけたのでしょうか。                     </div>
展 開 前 段	2 資料「友達だから…」の前半部を視聴して、主人公の気持ちを中心に語り合い、「いい友達」について考えていく。 <hr/> ① けがをおして陸上の大会に出ようとする達也に対する「ぼく」の気持ちについて語り合う。 ① 「ぼく」が達也にかけた言葉を考え、発表する。また、黒板にネームカードをはる。 ② 小グループを組み、自分が考えた「ぼく」の言葉と、そう考えた理由とを語り合う。 ③ 自分が選択した立場から役割演技を行う。 ※ 途中で役割交代を行う。	○主体的な学習となるよう、語り合いたい場面を子どもにいくつか選択させ、その中から教師が場面を決定する。 ○気持ちを「むりしないで…、がんばれ、どうしよう…」という三つに分け板書する。 ○自分の今の考え方が認識できるよう、また、他者の考え方を確認することもできるよう、白のネームカードを黒板に貼らせ立場を明確にさせる。 ○多様な考え方の交流が可能となるよう、違う考え方の友達と語り合うというグループ構成の視点を提示する ○三つのどの立場も、達也のことを考えた気持ちから生まれていることに気づかせる。そのために、役割交代を行わせ双方の友達を大切に思う気持ちにふれさせる。	① 黒板にネームカードを貼る。 <貼る位置による気持ちの違い>  <p>※ここには具体的な気持ちを板書する</p> <p>青 紫 赤 むりしないで… まよう がんばれ</p> <p>a b c d e f g ネームカード</p> <p>○ ネームカードをもとに、子ども達は違う考え方の子と小グループを組む。 例：a → f g や c d e と語り合う。</p> ② 小グループを組み語り合う。  <p>○ 小グループでの語り合いでは心情テープを活用して気持ちを表現する。</p> ③ 役割演技を行う。  <p>・最初は自分の選んだ立場から演技に参加する。 むりしないで… まよう がんばれ</p> <p>↓</p> <p>・途中で役割交代を行う。</p> <p>※どちらも友達のことを大切に思っていることに気がつく。</p> <p>○参観者も色カードを使い参加する。</p>
展 開 後 段	3 「いい友達」をキーワードにして、これまでの自分を振り返る。	○自分も大切に思われている存在であることに気づかせるため、友達に自分ができたことだけでなく、友達から親切にしてもらったことも想起させる。	
終 末	4 教師の話を書く。	○心のノートのパ44を開かせ、内容が本時の学習と関連していることを知らせ、これからの生活の中で友達について思うとき、活用できるようにする。	

## 「友達だから…」

### 前半

ぼくと達也は、今高校二年生。小学校のときからずっと友達で、達也はぼくにとって大切な友達だ。

達也にはずっと夢があった。それは、陸上の五千mの種目で、全国大会に出ることだった。

達也は中学校のころからずっと走るのが速く、高校生になってからは陸上部に入り、毎日毎日つらい練習をしようけんめいに続けてきた。そして、この前の県の大会で優勝し、ついに夢の全国大会に出場することが決まったんだ。達也の夢が、ついにかなったんだ。ぼくは、それはもう自分のことのようにうれしかった。だって、達也はぼくの友達だから。

でも、全国大会まであと二週間となったときに、その事故はおこってしまった。

その日ぼくは、陸上部の練習を見学しにきていた。達也を応援するためにだ。達也はいつものようにトラックを走っていた。とても調子よさそうで、スピードをつけてカーブを走っていた。そのときだ。とつぜん達也がバランスをくずして大きく転んでしまった。

「あっ…!!」

達也は、そのままその場所にうずくまってしまった。顔はいたみでゆがんでいる。自分一人では立ち上がることができず、仲間にだきかかえられてベンチに運ばれてきた。達也の足首のあたりが赤くはれていた。ひどいねんざだった。かんとくが思わず声をあげた。

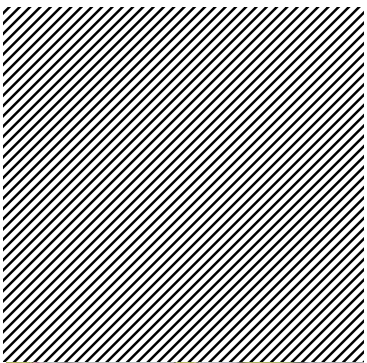
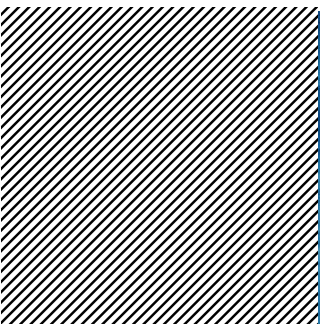
「これはひどい。達也、二週間後の大会は出られないかもしれないかもしれんぞ…」

それを聞いて、達也の目にみるみる涙があふれてきた。

「ぼく、絶対になおします。絶対に出ます。だって…」

ぼくには、達也の気持ちがいいたいほどわかった。夢だったんだよね。ずっとずっと、この大会に出ることをめざしてがんばってきたんだよね。なのに…

達也の気持ちを思うと、ぼくの目にも、涙があふれてきた。



それから二週間が過ぎた。明日はいよいよ大会の日だ。ぼくは達也のことが気になり、達也の家に様子を見に行った。

出がけに、陸上をしている大学生のぼくの兄から言われていた。

「あのな、ねんざしていると痛くて走れないんだぞ。それに、無理して走ると、また同じところをけがして、今度はもっともっとひどくなるんだ。達也君、大丈夫なのか。達也君の所に行つて、ひどいようなら無理しないように言つてあげたほうがいいぞ。お前の大切な友達なんだろ。無理したら、あとからこうかいするかもしれないぞ。」

だから、ぼくは心配で心配で、達也に会うなり、すぐにけがのことをたずねてみた。すると、達也はこう言った。

「ほら、見てよ。まだはれは残っているけれど、ずいぶんよくなつただろ。大丈夫だよ。走れるさ。明日は絶対ががんばつて走ろうと思うんだ。だって、夢の大会だもんな。」でも…よく見ると、達也の足はまだ赤くはれていた。たぶん、明日は走れるかどうかぎりぎりのところだと思つた。

(無理したら走れるかもしれない。でも、もし途中でけががひどくなつてしまつたらどうしよう。大会は明日…この大会は達也にとつては夢の大会なんだ。ぼくは、友達として達也に今なんて声をかければいいんだろう。ぼくはなんて…)

## 後半

そんなぼくをみて、達也が話しかけてきた。

「君が、今なにを考えていたのか、ぼくにはよくわかるよ。君は、ぼくがけがをしてからずっと、ぼくのことばかり考えてくれていたんだろう。ぼくのことを考えて…考えて…そして明日、このままぼくを応えんするのか、それともやめなよつて言うのかまよつていたんだろ。」

ぼくは、小さくうなずいた。

「だって、君はぼくの友達だもの。だからぼくは…」

「ありがとう。うれしいよ。あのさ、大会にできるかどうかは、明日の朝の足の具合をみて、ぼくが自分で決めるよ。心配しないで。無理はしないから。でもね、君がぼくのことをこんなに思つてくれて、本当にうれしいよ。ありがとう。やっぱり君は、ぼくの友達だよ。」

そういつて達也はぼくの手をにぎりしめた。その目には涙がうかんでいた。ぼくも、達也の手を強く強くにぎりしめた。いつのまにか、ぼくの間にも涙がうかんでいた。

